

かぬまふるさと大使 渡辺一馬選手展 ～全日本連覇の軌跡～



「全日本ロードレース選手権」で2連覇を達成した、鹿沼市出身のプロライダー・渡辺一馬選手。その2022年の激闘を追体験する企画展。
【期間】2023年1月8日(日)～1月23日(月)
8:30～21:00 ※9日(月祝)は休館
【場所】鹿沼市民情報センター1階
栃木県鹿沼市文化橋町1982-18

「かぬまふるさと大使」で鹿沼市出身のプロライダー・渡辺一馬選手が、国内最高峰のバイクレース「全日本ロードレース選手権」ST1000クラスで2連覇を達成しました。おめでとうございます。

この資料は2022年の激闘を追体験する企画展本編のWEB版です。

■発行：鹿沼市■



※全日本ロードレース選手権のレースの動画視聴、詳細なりザルト、最新情報等は公式ホームページ

「MFJ SUPERBIKE Official Fan-Site」をご覧ください。

<https://www.superbike.jp/>



【渡辺一馬選手 プロフィール】

1990年05月06日生まれ。

父親の影響から5歳の誕生日にポケバイを与えられ、初めてのレースは6歳。

9歳からミニバイクレースを始めると各地で数々のチャンピオンを獲得し、14歳になる2004年にロードレース GP125 にデビュー。初年度にして登竜門と言われる筑波ロードレース選手権シリーズのチャンピオンを獲得します。

2005年には全日本ロードレース選手権ヘスポット参戦をし、翌2006年にはフル参戦を開始。

この年はWGPもてぎラウンドでのフル参戦チームである human gest Racing Team からの代役参戦をきっかけに実力を認められ、WGP シーズン後半の3戦へ出場。

貴重なヨーロッパでの世界選手権デビューも果たします。

2009年には当時全日本選手権きっての激戦区 ST600 へとステップアップすると並み居る強豪と互角に戦いルーキーオブザイヤーを獲得。

2011年には HONDA 系トップチームの Kohara Racing へと移籍すると、着々と結果を残し2013年には念願の全日本チャンピオンを獲得します。

そこからは2014年に J-GP2 へ、そして2015年には全日本最高峰の JSB1000 へと着実にステップアップしていきます。

2016年には F. C. C. TSR に移籍し世界耐久選手権シリーズという新たな挑戦をし、初参戦となったル・マン 24 時間レースで3位表彰台を獲得するなど、チーム内で唯一フル参戦し活躍しました。

2017年には Kawasaki のトップチームである Kawasaki Team GREEN へと移籍。上位でレースを展開し、シリーズランキング3位を獲得。鈴鹿8時間耐久ロードレースでも2位表彰台に上ります。

2018年には、Kawasaki にとって2007年以来となるスプリントレースでの優勝を達成。鈴鹿8時間耐久ロードレースでも3位表彰台を獲得しました。

2019年も Kawasaki のエースとして活躍、ランキング6位となりました。

2020年、師と仰ぐ伊藤真一監督の新チーム「Keihin Honda Dream SI Racing」に移籍。再び HONDA のマシンを駆り、JSB1000 クラスでランキング5位となりました。

2021年にはチームの名称が「Astemo Honda Dream SI Racing」に変わり、ST1000 クラスにスイッチ。2回目となる全日本チャンピオンに輝きます。

2022年も ST1000 クラスに参戦。ディフェンディングチャンピオンとしてゼッケン1を背負い、6戦中4勝を挙げ連覇を成し遂げました。

2023年も ST1000 クラスに参戦し、3連覇に挑戦します。

(渡辺一馬選手ホームページから引用・一部加筆修正)

オフシーズン

全日本は11月初旬に最終戦が行われることが多いが、2021シーズンは新型コロナの影響で9月に終了。2022開幕戦まで約半年と、例年より長いオフシーズンを迎えた。

しかし、トレーニングやスポンサー等への報告、来シーズンに向けた足場固め等、レースはなくともやることはたくさんある。



2021年11月30日、渡辺選手が「かぬまふるさと大使」を務める地元・鹿沼市役所を訪問。伊藤真一チーム監督とともに、ST1000クラスのチャンピオン獲得を報告した。市長公室には渡辺選手のヘルメットが展示されている。



「かぬまふるさと大使」は、鹿沼市が市のPRのため依頼しているもので、渡辺選手はことあるごとに情報発信されている。

市役所前には、チャンピオン獲得を記念し横断幕が張り出された。ポーズをとる渡辺選手と伊藤監督。



鹿沼市下永野の「鹿沼木霊の森」にお子さんを連れて登場。ここはバイクでオフロード走行を楽しめる施設。右側は、全日本などで実況放送を務め、自身もバイクを楽しむアナウンサー、MCシモ氏。



中央は「鹿沼木霊の森」管理人の杉浦氏。左側は2021全日本J-GP3クラス2位の小室旭選手。渡辺選手とは同じチームに所属していたこともある。ここには、全日本ロードレースや全日本スーパーモト（舗装路とオフロードを組み合わせた競技）の選手も度々訪れ、トレーニングを行っている。



2022年2月、茂木町のツインリンクもてぎ・北ショートコースでサーキット走行トレーニング。これは練習用のモタードマシン（舗装面用のタイヤを履

いたオフロードバイク)。



ホームストレートを長距離ウイリーで駆け抜ける渡辺選手。レース終了後などにファンサービスとして行うライダーも居るが、安定して長距離を走るには技術が必要だ。



ロード用のマシンに乗り換えてトレーニングを続ける。この日は2台を交互に乗り換えながら、半日を走行練習に充てていた。



ツインリンクもてぎは、3月から名称が「モビリティリゾートもてぎ」に変更された。2022年の全日本ロードレース選手権は、地元・栃木、ここのロードコースで開幕戦を迎える。

連覇をかけた戦いの始まりが迫ってきていた。

Round 1 モビリティリゾートもてぎ



ロードコース全長4.8km。2022シーズンの全日本は、地元栃木の「モビリティリゾートもてぎ」で開幕する。世界を巡る最高峰のロードレース「MotoGP」の日本ラウンドが行われるコースでもある。



3月下旬、本番に先立ち公式行事「公開テスト」の日程が設けられた。開幕直前、今年使うレース用マシンで現場を走行できる数少ない貴重な機会。各チームとも走り込み、マシンの調整を進めていく。



ST1000クラスの最高速度は実に時速300km付近と凄まじい。しかしコーナーを曲がる際には最低限の減速を行

い、遠心力で外側に飛ばされないよう内側にマシンと体を傾ける。自転車でも曲がる際には傾けるが、バイクのレーシングスピードではヒザやヒジが路面に着く程傾ける（バンクする）こともある。



立体交差「ファーストアンダーブリッジ」の下。コーナリングで下がった速度を取り戻すため、排気量999ccのモンスターマシンが唸りを上げる。急加速の際、そのあまりのパワーにフロント（前輪）が浮き上がった。



4月2日（土）、遂に開幕戦の予選日を迎えた。全日本ST1000クラスでは、基本的に土曜日に予選、日曜日に決勝レースが行われる。予選の規定時間中、各ライダーは何周してもよく、そのうち一番早い周回時間を使って順位を決める。



各チームにはピット（整備エリア）が割り当てられる。Astemo Honda Dream SI Racing は、ST1000 クラスの渡辺一馬選手、JSB1000 クラスの作本輝介選手、ST600 クラスの Muklada SARAPUECH 選手の 3 人を擁するビッグチームだ。左手前が前年度チャンピオンの証、ゼッケン 1 をつけた渡辺選手のマシン。



開幕戦、ST1000 クラスには 35 台がエントリー。2022 シーズン、チャンピオン候補としてよく名前が挙げられていたのは、2021 年チャンピオンの渡辺一馬選手と、2020 年チャンピオンの高橋裕紀選手だった。

下馬評通り、予選は#10 高橋裕紀選手が 1 分 50 秒 393 で 1 位を獲得、続いて渡辺選手が 0.182 秒差で 2 位に着けた。



4 月 3 日（日）、迎えた決勝日。

予選は決勝レーススタート時の並び順を決めるもので、この時点ではまだ誰もランキングポイントは 0 だ。あくまで決勝レースの結果にのみポイントが付いてくる。



昼、ステージで Astemo Honda Dream SI Racing のトークショーが行われた。中央が渡辺選手。チーム、ライダーのファンが詰めかける。

新型コロナの影響で、しばらくこういったファンサービスは行われなかったが、ようやく再開されるようになってきた。



決勝の2時間前。地元王者の開幕戦に、佐藤市長が激励に訪れた。拳を合わせる二人。

レースでは、激励・応援などの際、拳を合わせる人が多い。



決勝直前。装備に身を包み集中を高める渡辺選手。ヘルメットには透明のバイザーが装着されていた。快晴のときはスモークが入ったものが使われる。

チームスタッフが暗い空の様子を伺う。少し前に降った雨の影響で路面はまだ湿っていた。こうした微妙な路面コンディションでは、使用するタイヤの選択が大きく命運を分ける。



ピットを出てコースに向かう。

乾いた路面向きのスリックタイヤか、濡れた路面向きの

レインタイヤか？ この時点での選択は排水用の溝を備えたレインタイヤ。ピットを出たライダーはコースを周回した後、予選で決まった自分のスタート位置（グリッド）に向かう。



渡辺選手が2番グリッドに到着した。コースを回り路面状況を確認した渡辺選手、チームの選択は、乾いた路面用のスリックタイヤ。いまだ湿った場所はあるが、レースの途中で乾いていくと見込んだのだ。

同様の選択をしたチームは多く、グリッド上、タイヤの交換が急ピッチで進められていく。



スリックタイヤで濡れた路面を走るとスリップの危険性が高い。逆にレインタイヤで乾いた路面を走ると、みるみるうちにタイヤが劣化し、終盤はまともに走行できなくなることもある。

そして、遂に決勝レースが始まった。読みどおり路面は乾いていく。スリックタイヤの選択は正解だった。



決勝は15周を回りきった順番で順位が決まる。
見事なスタートを決め飛び出したのは、やはり#10 高橋選手と#1 渡辺選手だった。渡辺選手は1週目の途中で高橋選手をかわしトップに立つと、そのまま高橋選手を引き連れ先頭で周回を重ねていく。
しかしレースが中盤に差し掛かった頃、運営からペナルティに関する通知が発行され、中継放送等でチームや観客の知るところとなった。



通知の内容は「グリッド上での作業違反」。タイヤ交換等は決勝レーススタートの3分前までに完了しなければならないという規則があり、それを超過してしまったのだ。罰則の「競技結果に30秒加算」が与えられたのは4チーム。その中に渡辺選手も含まれていた。
そんな中、渡辺選手は最後までトップを守り抜きチェッカーフラッグを受ける。30秒加算の結果、順位は6位となってしまったが、王者らしい強い走りを見せつける開幕戦となった。

Round 4 スポーツランドSUGO



インターナショナルレーシングコースは全長3.6km。宮城県村田町の山中にあり、国内サーキットの中では最大の高低差がある(69.83m)。

Round 2と3ではST1000クラスのレースが行われないため、ここSUGOが2レース目の舞台となる。



5月前半に公開テストが開催された。今回は30台がエントリーしている。

今年のST1000クラスは全6レースが開催され、それぞれの順位に応じてポイントが与えられる。1位は25ポイント、6位は10ポイントとその差は大きい。年間ランキングはそのポイントの累計で決まる。

ここで表彰台に立ちポイントを挽回したい状況だ。



6月4日(土)、予選。

路面のコンディションも良く、多くのライダーが自己ベストを更新する中、渡辺選手も周回を重ねるごとにペースアップ。ついには自身が持っていたコースレコードを更新、1分28秒673で予選1位を獲得した。

2位は0.213秒差で國峰琢磨選手、今年ST1000クラスにステップアップした若手だ。ST1000のレースがないRound 2・3で、同チームの負傷ライダーの代役としてJSB1000クラスに参戦。経験を積み強さに磨きがかかってきた。



予選1位のライダーは、決勝レースの1番グリッド(ポールポジション)を得て、ポールシッターと呼ばれる。ポールシッター記者会見で記者の質問に答える渡辺選手。

今回更新したコースレコードは、さらに更新されるまでホームページ等に掲載され、自身を含め全ライダーの新たな目標のひとつとなる。



6月5日（日）、決勝日の朝。
万全の状態をライダーを送り出すべく、マシンの整備を行うメカニック。万一の転倒や故障でマシンが損傷した場合は、その修理で夜を徹することもある。
メカニックをはじめ、多くの人材が力を合わせてライダー、レースを支えている。



決勝日の朝には、時間は短いもののフリー走行の枠が設けられている。ここで最後の確認、調整を行う。
走行前、ひとり集中を高める。王者の証「1」を着け連覇を期待されて戦う、その重圧はどれほどのものだろうか。



日本一の高低差が特徴のコース。10%の上り勾配を一気に駆け上がる。
長い直線では、空気抵抗をできるだけ小さくするため、体をぴったりとマシンに伏せる。時速300kmの向かい風との戦いだ。



11:30、報道陣のカメラに囲まれピットを出る渡辺選手。前年度王者・ポールシッターの戦いに注目が集まる。
決勝レースが始まる。



ポールポジション、1番グリッドに着き、集中を高める。
単純にゴールに一番近いだけでなく、スタートがうまく決まったときに前のライダーが邪魔にならない。
決勝で順位は大きく変わるとはいえ、少しでも有利に戦

うためにやはり予選の順位は重要になる。



そして遂に18週の決勝レースが始まった。渡辺選手は順調にスタートを決める。

しかし、1周目が終わり戻ってきたホームストレートで多重クラッシュが発生。レース継続困難となり、中断を示す赤旗が掲示された。レース中の選手への各種告知は様々な色・模様の旗の掲示によって行われる。



今回のクラッシュはライダー・マシン・コース整備等への影響が大きく、再開に時間を要するため、他クラスの決勝と時間を入れ替え、18周を16周に減算して行われることになった。

午後3時、再びポールポジションに立つ渡辺選手。前方にライバルは居ない。1番グリッドの視界。



仕切り直しでもスタートが決まり、複数台が接近戦でトップ争いを繰り広げる。

渡辺選手は4週目で先頭に立ち、中盤まで#45 埜口選手、#10 高橋選手、#29 國峰選手のトップ集団を牽引。至近距離で各ライダーが隙を伺い、順位が目まぐるしく変わる。



そして8周目、#29 國峰選手が抜け出してトップに立つと、#45 埜口選手と最後の最後までトップ争いを繰り広げる展開となった。



#29 國峰選手がST1000クラス初優勝を遂げ、#45 埜口選手が2位に、#10 高橋選手が3位でチェッカーフラッグを受けた。渡辺選手は4位でフィニッシュ。上位入賞だが惜しくも表彰台を逃してしまう。



決勝後のミーティング。険しい表情で頭上のモニタを見上げる渡辺選手。

6位・4位と来てランキングは4位、ポイントは23。
1位は高橋選手で41、2位は國峰選手で38、3位は南本選手が31で続く。残り4戦で追いつき追い越さねばならない。

Round 6 オートポリス



インターナショナルレーシングコースの全長は4,674m。

大分県日田市の山中にあり、熊本空港行きの飛行機から全貌を見られることもある。(2019年撮影)

今回、オートポリスではST1000クラスの決勝レースが2回行われる。全6戦中、1/3を占める重要なラウンドだ。今回は28台がエントリーしている。



8/26 (金) 練習走行

SUGO大会の後、Round 5ではST1000のレースがなく、3年ぶりに開催された夏のビッグレース「鈴鹿8耐」を挟み、2か月半ぶりの全日本のレースとなる。走り込み、体、マシンをオートポリスの環境に合わせていく。



8月27日(土) 予選・決勝レース1

午前中に35分間の予選が行われた。その中で各ライダーの1番早いタイムを比べ、午後に行われる決勝レース1のグリッド順が決まる。同様に、2番目のタイムの比較により日曜の決勝レース2のグリッド順が決められる。



渡辺選手は前戦SUGOに続き、ここでもコースレコードを塗り替える快走を見せる。決勝1、2ともポールポジションを獲得した。

ファーストタイムは#13津田選手、#29國峰選手が続き、セカンドタイムでは#29國峰選手、#13津田選手が続いた。



予選を終えピットに戻ってきた渡辺選手を、チームスタ

ップが出迎え祝福する。重要な折り返しのラウンド、最高の位置からスタートできることになった。チーム全体で戦った成果だ。



予選後のポールシッター記者会見。記者からの質問に笑顔で答える渡辺選手。

「全6戦のうち2戦がこの2日間にあり山場だと思うが、いつもどおりひとつひとつ勝つこと、どうやったら勝てるかだけを考えていく」



午後、シーズン3回目の決勝レース。スタッフとのミーティングを終え、ひとり集中を高める。



1番グリッドに到着。レース前には、グリッド順に選手紹介の放送が流れる。ファンに手を振り応える渡辺選手。



1番グリッドの斜めやや後方に2番グリッド、その向こうに3番グリッドが配置されている。この最前列の権利を得ることを「フロントローを獲得」と表現する。4～6番は2列目からのスタートになる。



グリッド上、刻々とスタートの時間が迫る。やれることはやった。拳を合わせライダーに全てを託し、スタッフはピットに戻っていく。そして14週の決勝レース1が始まった。



スタートを決めた渡辺選手を先頭に、3台のトップ集団が形成され、そのまま周回を重ねていく。途中から3番手が後退していき、渡辺選手の後ろで#29 國峰選手が追う2トップの展開となる。



ピットのモニターで戦いを見守る伊藤真一監督。
全日本や世界選手権で活躍し、幾度もチャンピオンを獲得したレジェンドライダー。2020年にこのチームを立ち上げた。
チーム「Astemo Honda Dream SI Racing」のロゴ「SIR」は、名前の頭文字にRacingのRがついたもの。



渡辺選手は先頭を最後まで譲らず、#29 國峰選手を従えそのままチェッカーフラッグを受ける。
念願のシーズン初優勝。
ウイニングランを終え、1位のシートにマシンを入れる。



3レース目で遂に1位表彰台へ。アナウンサーのコールに笑顔で登場する渡辺選手。
ポールポジションのライダーが優勝することを「ポール

トゥウィン」と呼ぶ。予選も決勝も速い、強さの証のひとつである。



#29 國峰選手が2位、#10 高橋選手が3位に着け表彰台へ。前半3レースでこの3人が1勝ずつ挙げ、ポイントは國峰選手が58、高橋選手が57、渡辺選手が48となった。



シャンパンファイトのセレモニー。
黄色のキャップは、ポールポジション獲得時や表彰台獲得時に使用タイヤメーカーから贈られるもの。ST1000クラスのタイヤはワンメイク（単一メーカーに限定）で、ダンロップが使用されている。これもマシンの能力差が付きにくい要素であり、その分ライダーの能力が問われる。



晴れ晴れとした表情でカメラマンに「1」のハンドサインを作る渡辺選手。

ポイント逆転に向け、遂に狼煙が上がった。



8月28日（日）決勝レース2

昼に開催された「ピットウォーク」の様子。各チームのピットの前にマシンが展示され、ライダーやレースクイーンが登場してファンと交流できる時間。

しかし新型コロナウイルスの影響で、いまだ握手したりサインをもらったりすることはできない。



夕方、14週の決勝レース2が始まった。

しかしスタート直後に転倒があり赤旗中断、9周に減算されてリスタート。ここでも渡辺選手は良いスタートを決めトップに立つ。決勝レース1同様、#29 國峰選手を従えて周回を重ねるが、その差を徐々に広げていく。



そのまま約3秒の差をつけ単独トップでフィニッシュ。中盤オートポリスでの戦いを劇的な2連勝で飾った。サインエリアで出迎えるチームスタッフ。



決勝レース終了後、各ライダーはそのままコースを一周してからピットに戻る。勝利したライダーのそれはウイニングランと呼ばれ、観客やライバルから祝福が寄せられる。

立ち上がり拳を突き出して喜びを爆発させる。



最高の結果を運んできた渡辺選手。伊藤監督の出迎えに、ヘルメットを外す時間も惜しんで抱擁を交わす。



「1」のハンドサイン。

オートポリスは標高が高く比較的涼しいが、8月、夏の最中の熱戦にヘルメットの中は汗だくだ。



決勝レース1よりもさらに差を広げての2連勝。

晴れ晴れとした表情で表彰台に上がった渡辺選手。



「P1」はポジション1=1位を現す。これは8/27と8/28の両方で優勝したという意味になる。

6戦中4戦を終え、ポイントは

#29 國峰選手78、渡辺選手73、#10 高橋選手70

となり、渡辺選手は遂に2位まで浮上した。

ポイントは1位で25、2位で20獲得できるが、この5の差はちょうど1位の國峰選手との差と同じだ。



決勝レース2でも2位は#29 國峰選手。3位には#13 津田選手が入った。

ポイントリーダーの國峰選手は、これまで4位・1位・2位・2位と今季その強さを発揮している。残り2戦、ランキング争いの最大のライバルとなる気配があった。

Round 7 岡山国際サーキット



岡山県美作市の山中にあるサーキット。全長3,703m。

ST1000クラスには31台がエントリーしている。台風が接近しつつあり、天候の変化、そして日曜の決勝レースは開催できるのかどうか…関係者が気を揉む中、スケジュールが進行していく。



9月16日(金)練習走行日

岡山国際サーキットは、現在ポイントリーダーである#29 國峰選手が所属するTOHO Racingのホームコースであり、國峰選手も何度も走っている。今回も強力な競合相手となることが想像された。



9月17日(土)予選

40分間のタイムアタック。各ライダーとも積極的にアタックするが、やはり抜け出しポールポジションを獲得したのは#29 國峰選手だった。

國峰選手が1分32秒166、渡辺選手が0.25秒差で続く。32秒台はこの二人のみで、3位は#6 豊島怜選手の1分33秒038だった。



9月18日(日)決勝レース

朝のウォーミングアップラン。

前日、台風接近への対応として、日曜日のスケジュール変更が通知されていた。全体的に前倒しになり、ST1000クラスは18週の予定だったが、15周に変更された。



朝のうちは路面が濡れていた。レインタイヤ、クリアのバイザーで周回を重ねる。

決勝は午前中に行われる。台風の接近に伴い天候は不安定。影響はあるだろうか？



風と、直前に行われたJ-GP3クラス決勝の走行により路面はほぼ乾燥している。すぐに雨が降る気配もないため、乾燥路面用のスリックタイヤが装着された。10時25分、マシンがピット前に引き出される。



マシンに乗る前の、渡辺選手のルーティーンのひとつ。選手ごとに様々なものがある。

生身でマシンに跨り時速300kmの世界で戦うエキストリームな競技であり、極度の運動能力、集中力、判断力等が必要不可欠だ。



準備の進む2番グリッド。まだところどころ路面が濡れている。

タイヤに巻かれているのはタイヤウォーマー。ロードレースのタイヤは接地時の変形等により熱く柔らかくなり、路面にがっちり食いつく。開幕から能力を発揮できるように、スタート前に暖めておくのは重要な作業だ。



決勝スタート直後は、#29 國峰選手、#10 高橋選手、#6 豊島選手、渡辺選手の順でトップ集団が形成される。3周目で豊島選手が転倒し3台でのバトルとなるが、周回が進むと國峰選手が徐々に2番手以下を引き離して単独トップの体制を築いていく。



メインストレートを通過する渡辺選手を見送るチームスタッフ。

その後も國峰選手トップのままレースが進んでいくが、13周目、高橋選手が周回遅れを抜く際に渡辺選手がイン側に切り込んで抜き、2番手に浮上する。



渡辺選手は13周目の最終コーナーで一気に國峰選手との差を詰め、14周、残り2週の第1コーナーでイン側から抜き去り遂にトップに立つ。

「「よっしゃああああ！」」

その瞬間、ピットではチームスタッフ達が歓喜の声を挙げた。



そのまま國峰選手を引き離し、渡辺選手がトップでチェッカーフラッグを受ける。終盤のドラマチックな逆転劇で、オートポリスから続き3連勝を達成した。



ウイニングランを終え、伊藤監督に笑顔で出迎えられる渡辺選手。駆け寄るスタッフと次々に抱擁を交わす。



ここまで5戦中4回のトップチェッカー。ポイントでは苦戦していたが、この3連勝で遂に1位タイとなった。対する國峰選手は4位・1位・2位・2位と来ている。最終戦でも強敵として戦うことになるだろう。



3位には高橋選手が入り表彰台へ。この時点の取得ポイントにより、チャンピオン獲得の可能性が残っているのは3人に絞られた。

1位 渡辺選手・國峰選手 98

3位 高橋選手 86

決戦の地は最終戦、鈴鹿MFJ-GPだ。

Round 8 鈴鹿サーキット



三重県鈴鹿市の市街地にあり、F1も開催される日本を代表するサーキット。全長5,821m。

例年、全日本の最終戦はここで行われ「鈴鹿MFJ-GP」というタイトルが付く。ここまでポイントを獲得しているなど、条件をクリアしないと出場することができない。



11月3日（木）練習走行

最終戦には24台がエントリー。土曜日に予選、日曜日に決勝レースが行われる。

この日は30分×2本の練習走行が行われ、いずれも渡辺選手がトップタイムと好調な出だしを見せる。ポイント同点のライバル#29 國峰選手は5番手。



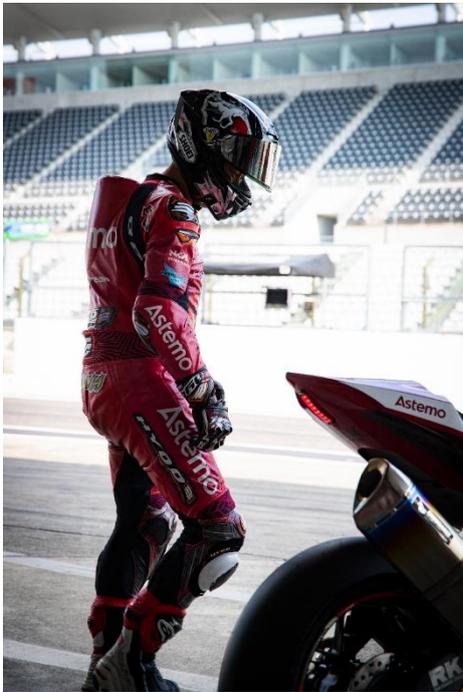
11月4日（金）練習走行

レーシングスーツを装着し、ピットに入る渡辺選手。ウィークを通して天気予報に懸念要素はなく、ドライ路面での真っ向勝負が予想された。



走行前、念入りに装備を整える。

ヘルメット、スーツ、グローブ、ブーツ。スーツ内にもチェストガード等を装着。極限環境で戦うライダーを安全面からサポートする。



チームスタッフとともに調整を繰り返し作り上げた愛機。どんな思いで見つめているのだろうか。今シーズン最後の戦いに向け、この日も30分×2本の練習走行をこなす。



午後の走行、夕陽に向かって駆ける。走行中は絶えず全身の姿勢制御を行う。全長5,821mの鈴鹿サーキット、ST1000クラス決勝12周の場合、およそ26分間を全力で駆け抜ける。

Pos	Rank	Class	Name	Sec1	Sec2	Sec3	km/h	Sec4	Lead	Gap
1	1		渡辺 一也/Kaz	37.414	43.706				2:09.142	2:09.830
2	29		國峰 博樹/Tak	36.917	23.419	49.539	295.75	24.241	2:09.632	2:09.479
3	10		高橋 裕紀/Yuki	40.029			33.26		2:11.462	2:09.696
4	3		南本 宗一郎/Sa	38.521	29.880	1:16.892			2:10.862	2:09.768
5	6		黒島 悠介/Hi	44.067	32.718	1:27.777			2:10.979	2:09.899
6	15		村瀬 健児/Tak	36.517	23.045	53.598	278.85	39.730	2:12.899	2:11.888
7	13		前田 新太郎/Na	37.714					2:10.843	2:10.843
8	18		柴田 善祐/Yos	43.787	22.420	48.544	286.12	24.952	2:13.111	2:11.111
9	7		前田 豊助/Ken	40.187					2:11.111	2:11.111
10	22		石塚 健/Takes	37.973	23.470	50.128	271.11	41.796	2:13.111	2:13.111

この日の2本も渡辺選手がトップタイムと好調をキープ。

だがここで、やはりと言うべきか、國峰選手が調子を上り2番手に上がってくる。



走行後、スタッフと情報交換。リラックスした雰囲気。良い流れで明日の予選に向かう。

左上、チーム代表・チーフメカニックの小原齊氏は、Kohara Racing Team代表・監督として渡辺選手や伊藤真一監督・選手と長きに渡り関わっている。



11月5日(土) 予選

この日の走行は30分間の予選のみ。

序盤、#29 國峰選手が2分08秒106でトップに躍り出た。大半のライダーはこれからアタックをかけるというタイミングだったが、別ライダーの転倒があり赤旗中断となる。



予選が再開されアタックをかける各ライダー。しかしトップタイムの更新はなく、そのまま國峰選手がポールポジションを獲得した。

渡辺選手は4番手で今シーズン初めてフロントローを逃がす。しかし各ラップのタイムはムラなく安定してトップクラスであり、解説者にも「決勝では渡辺か」と評される走りだった。



11月6日（日）決勝レース

遂に迎えた最終戦。シーズン序盤にポイントで出遅れた分を怒涛の3連勝で取り戻し、#29 國峰選手と同点での決戦となった。次点の#10 高橋選手もチャンピオンの可能性が残っているが、12ポイントのビハインドがある。



渡辺選手と國峰選手、どちらが前でチェッカーフラッグ

を受けるのか。明快な図式となった。

渡辺選手なら2連覇。國峰選手ならST1000クラスのルーキーイヤーでチャンピオン獲得となる。



午後2時20分、ピットを出る渡辺選手。
2022シーズン最後の戦いへ。



グリッド上でその時を待つ…
そして遂に決戦が始まった。



スタート直後は6番グリッドから飛び出した高橋選手が先制するも、すぐに國峰選手が抜いてトップに立つ。しかし鈴鹿を得意とする#3 南本選手が抜け出し、トップ集団を引き連れる形が出来上がった。渡辺選手はスタート直後7番手まで後退するも、5番手まで順位を戻し1周目を終える。



渡辺選手は2周目で豊島選手を、3周目で高橋選手を抜いて3番手まで浮上。南本選手の後ろで渡辺選手と國峰選手のバトルが繰り広げられる。そして7周目、渡辺選手が2人を抜いて一気にトップに浮上すると、國峰選手も南本選手を攻略。8周目には高橋選手も3番手に上がる。4台の集団の中、チャンピオン争いの3人が抜きつ抜かれつの熾烈な戦いを繰り広げる。



ピットではスタッフがモニター越しに力を送る。バトルの最中、渡辺選手が抜き返すたびに拳に力が入る。いいぞと頷くスタッフも居る。しかし抜かれても動揺は全く見られない。渡辺選手に全幅の信頼を寄せていることが見て取れる。そして僅差のまま、渡辺選手、高橋選手、國峰選手、南本選手の順でファイナルラップに突入した。



残り半周というところで高橋選手に生じた一瞬のスキを突き、國峰選手が2番手に浮上。チャンピオンを狙い渡辺選手の背中を追うが、そのままの順位でチェッカーとなった。命運を分けたそのタイム差は僅か0.374秒。



4連勝、ポイント逆転、チャンピオン獲得そして2連覇。

感極まりサインエリアで抱き合うスタッフ。
モニター内では渡辺選手のウイニングランが続いている。



チャンピオンフラッグを掲げ、ライバル達や観客の祝福を受けながらゆっくりとコースを回る。そして表彰台の下で待つチームのもとへ。



チャンピオンのシャツを着て待ち受けていた小原代表と喜びを分かち合う。



今シーズン、最後の最後、ファイナルラップまで戦い続けた渡辺選手と國峰選手。互いに激闘を称えあう。



左から、小原代表・チームメカニック、渡辺選手、伊藤監督。チームの歴史に輝かしい新たな1ページが加わった瞬間だった。



小原代表と表彰台に上がり優勝トロフィーを受け取る。優勝は金、2位は銀、3位は銅色の鹿(スズシカ=鈴鹿)。最終戦、改めて勝利の重さを噛み締める渡辺選手。



チャンピオン争いの3人が揃って表彰台に上がり、年間ランキングもその順位のまま確定した。全6戦の中、國峰選手と高橋選手も優勝を経験。シーズンを通して高次元の戦いが繰り広げられた。



決勝レースの表彰式に続いて、年間チャンピオンの表彰式。2022チャンピオンのボードを掲げる渡辺選手。



表彰式の後、記者会見で質問攻めにされた渡辺選手。ピットに戻ったのはレース終了から50分後だった。ともに戦ったスタッフにシーズンの感謝を伝える。



こうして激闘の2022シーズンが終わった。
6戦4勝、5回のトップチェッカー。ライバル達も強く
追い上げ逆転のレースも多かった。しかしそれが一層、
渡辺選手の勝負強さを力強く示すことになった。

2023シーズン、渡辺選手は再びディフェンディング
チャンピオン、そして3連覇を目指すチャレンジャーと
してさらなる戦いに挑む。